

## ルーヴル美術館展 ルーヴルには愛がある

国立新美術館 23.03.01～06.12 京都市京セラ美術館 23.06.27～09.24

「ルーヴル美術館」は、フランス・パリ中心部に位置する国立の美術館で、毎年800万人以上が訪れる世界で一番入場者が多い美術館として名高く、現在は、「古代ギリシャ・エトルリア・ローマ美術部門」や「絵画部門」など8部門に分けて展示がされて、世界的に有名な作品が勢ぞろいしている館である。

本展は、「ルーヴル美術館」の絵画コレクションから「愛をテーマ」に、16～19世紀半ばにかけての名画「約70点」あまりを精選し、フランス美術史の雄のみならず、イタリアやオランダからも重要画家が名を連ね、「聖なる愛」から「俗なる愛」まで、様々な愛の形を享受できるまたとない機会である。



フランソワ・ジェラルド《プシュケとアモル》1798年 油彩/画布

神話的作品は、美の女神ヴィーナスも嫉妬するほどの美貌の持ち主で、その美しさ故求婚者も現れなかった王女「プシュケ」に恋をした、愛の神「アモル」(キューピット)の物語で、画面左側に配される胸を両手が隠すような仕草を見せる王女「プシュケ」の額へ接吻を行う「アモル」が描かれている。

ジャン＝オノレ・フラゴナール《かんぬき》1777年頃 油彩/カンヴァス  
描かれている作品は、情熱に満ちた争いを象徴するのが主題となっている「かんぬき」で、左側のベッドのシーツの天蓋の色に、肉欲の罪を表わす血のような「赤」が描かれている。また、同じく人間の罪を象徴するのが、左側のベッド脇のテーブルにおかれた「りんご」である。寝室で争う恋人たちの衝動的な性的欲望、抵抗、あきらめで、作品は、暴力的と言えるほどの情熱に満ちている。画伯は、この作品の対比になるものとして《羊飼いの礼拝》(写真略)を描いて、聖なる愛と世俗の愛をはっきりと対比させている。